

本論文は、ビルマにおける、20世紀に入ってから植民地後期（～1941年）から日本占領期（～1945年）を経て独立交渉期（～1947年）までの、カレンと呼ばれる人々の民族意識と民族運動の形成過程を分析したものである。

本論文は3部から構成されている。まず第1部「植民地期における仏教徒カレンー3つのカレン史」では、1929年から1939年までに出版された、仏教徒のウー・ピンニャとウー・ソオによる二点の仏教的カレン史と、ソオ・アウンフラによるキリスト教的カレン史という、三つのカレン史書を取り上げ、特に前二者に示された仏教徒のカレン意識を検討している。

歴史的な文脈として、仏教徒のビルマ語世界で、王権の崩壊と宗教の衰退ととらえられた植民地化の流れの中で、この世の主権者として民族（ルーミョウ）の観念が生まれ、20世紀初頭には、民族を単位とした社会的・政治的運動が立ち現れるという文脈の中に、仏教徒カレンの史書の出現も位置づけられる。二つの史書は、いずれも「王統記」という体裁をとりながら、カイン／クウイン（ビルマ語のカレン）という民族を主権者として歴史を叙述している。

また、この二つの史書が書かれた、よりミクロな社会的背景として、ビルマ語の全国紙上で展開された「映画とカイン」論争を通じ、カレンが仏教世界の中で周辺化されている状況が上げられている。ビルマ人が「カレン」を指弾、軽蔑の対象とした時、この「カレン」に含まれ、仏教徒として貶められたと感じた僧侶など知識層に属する人々が、カレンもまた正統な仏教世界の一員である、とビルマ語読者に向けて反駁したのが、この二つの史書だった。

第2部「日本占領下のカレンーミャウンミャ事件とシュウエトウンチャ」は、こうしたキリスト教徒とは異なる自己意識の形成をしていた仏教徒カレンが、キリスト教徒と「民族的体験」を共有する契機となった、日本占領初期におきたミャウンミャ事件と、その指導者シュウエトウンチャを分析している。ここでは、ビルマ独立義勇軍やタキンというビルマ民族が中心となった勢力から、仏教徒からキリスト教徒まで多様な人々が「政庁協力民族としてのカレン」として一括して攻撃される中で、はじめてカレンとして共有しうる民族的体験をした事件として、ミャウンミャ事件が取り上げられている。この経験が様々な立場の人々に共有されていった過程の分析では、シュウエトウンチャという仏教徒カレン出身の指導者が、カレンの英雄としてキリスト教徒を含む多様なカレンの人々の意識の中に記憶されていったことが描かれている。

第3部「独立交渉期におけるカレン民族運動ー“a separate state”をめぐる政治」では、

広範なカレンを名乗る主体を糾合した独立交渉期のカレン民族運動が、一時は独立ビルマの枠内で、カレン民族としてのまとまりを保証される「カレンの郷土」＝”a separate state”を求める点で一致したことがあることなど、カレン民族運動＝ビルマからの分離運動という後世のイメージとは異なる展開があったことを解明している。

その上で、バプティスト・スゴを核とする主流派のカレン民族同盟が、ビルマ東部に大きなカレン州設立を望んだのに対して、同じくバプティスト・スゴを中心とした勢力でありながら、よりビルマ民族との混住という事実を受け入れるべきと考えたカレン青年機構は、ビルマ民族と親和的な政治制度をカレン民族の権利保障機構として選択した。これに対して、こうした平地カレンとは一線を画してビルマ政府との関係を形成しようとしたカレンニー諸派の動きもあり、カレンの運動が分裂していくことが描かれている。

以上のような本論文は、カレンの民族意識の形成と民族運動の展開について、従来の研究にない、新しい認識を提起している。

まず、第1部では、二つの仏教のカレン史書を発掘し、植民地権力とキリスト教宣教師による名づけ作用によってカレンという範疇が形成されたという従来の定説に対し、1920年代以降、ビルマ社会から周辺化された仏教徒としてのカレンが、「野蛮」な民族（ルーミョウ）ではなく、仏教的王権の伝統を保持する歴史をもつという自己主張をしていたことを解明し、キリスト教カレンとは異なる民族意識形成の道筋があったという、新しい認識を提起している。

また、第2部は、ミヤウンミヤ事件という史上初めての大規模なカレン＝ビルマ間の民族衝突事件を本格的に論じた点で、先駆的業績となっている。ここでは、それまで言説上のカレン＝ビルマ間の対立関係とは無縁であった仏教徒カレンの多くが、この事件でビルマ民族主義者から「政庁協力民族としてのカレン」の一部として規定され攻撃されることで、自らを「ビルマ民族に対抗的なカレン」という範疇に接合させていったことが、説得的に解明されている。

さらに、第3部の独立交渉期のカレン民族運動の分析では、従来、一路ビルマからの分離独立という方向に歩いていったとされることの多いカレン民族運動が、ビルマ独立の直前の時期においては、むしろ独立ビルマの枠内で、カレン民族としてのまとまりを保証される「カレンの郷土」を求めていたことを、イギリス側の資料を丹念に読解して実証した点で、独創的な業績となっている。

このように、本論文は、カレンの民族意識形成と民族運動展開に関する、貴重な実証的成果をもつ研究であり、確実にカレン研究の水準を高めるのに貢献した点で高く評価できるが、審査では、審査委員から共通して一つの大きな問題が指摘された。これは、筆者自身が本論の3つの部を「3つの断片」と呼んでいることにも示されているように、3部の相互関連が必ずしも明確ではない、特に、第1部、第2部の分析の中心にすえられている仏教徒カレンが、第3部の記述では姿を消してしまうという問題である。この点に関して筆者は、独立交渉期の仏教徒に関しては史料制約があること、各部のつながりが悪いのは

カレン民族運動が、それぞれの段階で直面した問題の構造の相違があるためであるとしたが、なお改善の余地のある問題であろう。

しかしながら審査委員会は、この問題点は、今後の研究の深化の過程で克服されるべきものであり、本論文の基本的意義を否定するものではないと判断した。したがって、本審査委員会はこの論文が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。